本だな

「変わる富士山測候所」

江戸川大学土器屋由紀子ゼミ　編，
春風社，2004年12月，250頁，
1890円．ISBN 4-86110-023-2

気象の分野で久し振りに「熱気」を感じさせてくれる本に出会った．山には無縁の私でさえそう感じたのだから，これはホンモノである．

さて，富士山と聞いて一般の人は何を思い浮かべるであろうか．そのむかし赤人や西行が仰ぎ見た霊峰，北斎や大観の描いた凛とした威容，新幹線の車窓から眺める四季折々の山肌の色，等々ひとさまざまであろうが，気象分野の人ならば風雪に耐え長年守り続けられてきた山頂の測候所のことを忘れてはなるまい．

その富士山測候所は，昨年秋，72年に亘る有人観測の幕を閉じた．しかし，これを単に時代の流れとだけ片付けてしまってはいけないであろう．

本書は，この節目に当たって編者の土器屋氏が中心となって行なった江戸川大学でのゼミをもとに纏められた貴重なドキュメンタリーである．土器屋氏は長らく気象研究所や気象大学校で研究教育に従事された優れた大気化学者であり，フィールド観測の重要性を誰よりも強く身をもって感じておられる方であることは昨年も若い学生達とともに再度ご自身で富士山頂まで足を運ばれたその熱意からも十分伺えよう．

構成は，富士山頂における気象観測の歴史，測候所の施設ガイド，山頂での仕事に様々な立場から携わってこられた方々の回想，そして新しい時代における山頂観測の意義と将来展望，の４部から成っている．執筆者は土器屋氏をはじめ二十数名に及ぶが，それらは決してバラバラの寄せ集めではない．異なる立場や年代の人々がひとつの旗の下に集まったかの如き熱意が見事に収束されている．誤植の多いことなど気にすることはない．編集の素人臭さがかえって新鮮である．

まず歴史を振り返ると，1932年の「中央気象台臨時気象観測所」の設立に先立って既に19世紀末から素朴ながら山頂気象観測が行われていたことに感嘆する．そこに刻まれている日本気象界の偉大な先達……たとえば正戸豹之助（気象学会初代会長！），佐藤順一（気象学会名誉会員第１号！），野中至，藤村郁雄，等々……のお名前は新田次郎の小説を通して記憶に留めておられる方も少なくあるまい．今は懐かしい「測候精神」という言葉は1960年代に学生のころ研究室内でも時折聞かされたものである．

歴史上もう一つのハイライトは東京オリンピックと時を同じく1964年に建設された富士山レーダー．当時の日活映画，石原裕次郎主演の「富士山頂」に描かれたひたむきな熱気は，レーダー建設から観測に到るまでの様々な仕事に粉骨砕身された方々の回顧談と相まって，単なる郷愁を超えた教訓としていまも残っている．気象観測データはインターネットで簡単に入手できるものと思い違いしている若い世代に襟を正して測候精神を学び直して貰いたい，と言えば頑固爺の説教に聞こえるだろうか．その意味で土器屋ゼミの若い学生達の瞳の輝きが見えるような本書は貴重である．

それはさておき，本書の最大の眼目は「変わる……」の表題の示す通り，新しい時代の山頂観測の意義を強調するところにこそある．天気予報のためレーダーで台風を捉えることは衛星観測に置き換わったとしても，それは決して富士山頂観測が時代遅れで無用の長物となったことを意味するものではない．

「気象観測から大気化学観測へ」の言葉に象徴されるように，エアロゾルや種々の大気微量組成を孤立峰の山頂で直接サンプリングしてその実態や変動を調べる大気化学は今後ますます発展してゆく新しい研究の世界である．事実，土器屋氏らのグループは1990年代はじめから既に富士山頂で「現場でモノを捉える」測定観測を継続し，グローバル物質輸送論の魁となる成果を発表してきている．

あえて地球環境問題という以前に，たとえばハワイマウナロアにおける二酸化炭素濃度の長年に亘る測定結果が大気科学全体にもたらしたインパクトに象徴される如く，地球大気の諸特性は長期間観測を継続してこそ初めて見えてくるものが多々ある．それ故にこのようなフィールド観測を継続してゆく意義があると言えよう．

本誌新年号の巻頭解説で強調した「新しい観測は新しい世界を切り拓く」の信念にも呼応して，生まれ変わった富士山観測所での成果が，近い将来，気象学・大気科学に新しい１ページを加えてくれることを期待させる本書は，一人でも多くの気象学会員に読んでいただきたい良書であると信じ，推薦する次第である．

（廣田　勇）

© 2005　日本気象学会